シロディールの社会史

開拓、征服、順応：
シロディールの社会史

グウィリム大学出版局
第三紀344年

歴史家によっては、人間のタムリエル入植をスカイリムのノルドの軍事拡張政策の一環としてとらえる傾向にある。実際には、スカイリムが興る以前から人間はタムリエルに入植し、そのほぼ全域に散らばっていた。彼らは「ネディック人」と呼ばれ、その中にはシロディール人の始祖、ブレトンの先祖、ハンマーフェルの原住民が含まれており、ひょっとすると今はなきモロウウィンドの人間も含まれていたかもしれない。厳密に言えば、ノルドは「ネディック人」の一派でしかなく、タムリエルの先住種族であるエルフと平和的に共存する道を見つけられなかった唯一の種族である。

イスグラモルがタムリエル最初の人間の入植者でないことははっきりしている。実際のところ、イスグラモルはアトモーラから移り住むという長い伝統にのっとって、「帰還の歌」にあるように「アトモーラの内乱から逃げようとしていた」のである。イスグラモルがやってくるまでの数世紀のあいだ、タムリエルはアトモーラにとっての「安全弁」であったのだ。不平分子、反体制派、反逆者、土地を持たない若者たち、その誰もがタムリエルという新世界を目指して、アトモーラからの困難な横断をやり遂げた。最近の考古学的な発掘調査で、ハンマーフェル、ハイロック、シロディールへの人類最初の入植は神話紀800—1,000年であることがわかった。これは、ハラルドよりも前にいたとされる12人のノルド王が歴史的に実在したと想定しても、イスグラモルがやってくる数世紀前のことである。

「ネディック人」はエルフの土地では少数派であるため、先住種族とは平和的に共存するより道はなかった。ハイロックやハンマーフェル、シロディールでは、それにおそらくモロウウィンドでもそれにならって「ネディック人」は繁栄し、神話紀の最後の数世紀に勢力を拡大していった。「帰還の歌」に歌われるように、こうした順応はスカイリムでのみ失敗した。これは推測だが、アトモーラからの援軍がそばに控えていたため、ノルドの始祖たちはスカイリムのエルフの権威に屈する必要はないと感じたのではなかろうか。実際のところ、初期のノルドの年代記には、歴史上最初のノルドの王とされるハラルド王（第一紀113—221年）が中央集権国家としてスカイリムを統合すると、「アトモーラの傭兵は故郷に帰還した」と記されている。細かい経過はどうあれ、パターンは決まっていた。スカイリムでの拡張が軍事的に進められ、征服によってフロンティアが延びるとそこへ人間が定住していくのだ。この地での人間とエルフの領土の境界は比較的はっきりしていた。

それでも、この「紛争地域」を飛び越えて、他のネディック人はエルフの隣人と混じりあっていった。第一帝都のノルド軍がついにハイロックとシロディールに進軍したとき、彼らはブレトンとシロディールの始祖が既にエルフに混じって暮らしていることに気づいた。実際のところ、ノルド人はエルフとブレトンを見分けるのに苦労していた。これらの二種族はそういうレベルまで混血が進んでしまっていたのだ。ノルド軍の到着により、ネディック人とエルフのバランスは乱れた。ノルドがハイロックとシロディールまで勢力を拡大したのはわずかな期間（200年に満たない）にすぎないが、その影響は甚大であった。それ以降、この地域での実権はエルフから人間へと移っていったのである。

シロディールの社会史

FormId	skyrim.esm:01ACCB
Owning plugin	skyrim.esm
Local FormId	01ACCB
Editor ID	Book2CommonFrontierConquest
Inventory image	(none)
Menu art	HighPolyBasicBook05
Value (gold)	5
Type	Book or tome
Weight	1
Can be taken	Yes
Teaches	(none)
Inventory description	(none)
Keywords	VendorItemBook
Locations	1261
Leveled lists	12
Scripts	0

© Bethesda Softworks LLC and the authors of the mods in the load order.
Exported and generated with SkyrimSourceExporter.